調査マンと台湾植民地官僚制

やまだ あつし
名古屋市立大学

はじめに

台湾総督府は、統治の必要上もあって台湾内外で様々な調査活動を行っていた。よく知られているのは、後藤新平民政長官が調査活動を重視したことである。調査だけを行ったわけではない（そもそも主目的は地租増徴である）が、後藤時代に台湾総督府が土地調査事業を行い『大租権調査書』など土地慣行調査を刊行した。土地調査とも絡むが『台湾私法』や『清国行政法』で知られる台湾の旧慣調査も後藤時代に著手された。調査は後藤時代だけ行っていたわけでない。台湾統治50年間に台湾総督府や関係機関が行った調査活動報告は、今日でも多数の刊行物となって残っている。刊行されなくても、雑誌に発表されたり台湾総督府公文類纂[1]に綴じられたりと、調査報告が残っているものは少なくない。これら調査報告は、今日の我々に貴重な情報を提供している。

本論の狙いは、調査マン（と本論で呼ぶ）すなわち総督府で調査を担当し調査報告を執筆した人物が、台湾総督府の官僚制の中でどのように処遇されたかを、明治大正期において原住民族とその居住地域について調査した人々を事例に考えることである。植民地台湾において何らかの調査をし、執筆をするためには、台湾総督府と関わりを持たざるを得なかったと言って過言ではない。まして調査をもとに、台湾で何らかの活動を考えていた場合は（東京や京都の帝国大学関係者、特に岡松参太郎のような帝大教授は別格として――岡松も臨時台湾土地調査局などの嘱託ではあったが――）、総督府の中に入り込まざるを得なかった。特に「学術研究」を主とする中央研究所や帝国大学[2]が台北に設立される以前はどうか。調査マンは、一般行政・警察担当者と官僚組織に同居しながら、調査せざるを得ない。そうであるならば、調査マンといえども総督府の官僚制の中で生き、官僚組織を相手に自己の目的を果たそうと試みざるを得ない。では実際、どのように調査マンは官僚制の中で処遇されたのであろうか。

総論報告「台湾総督府官僚制概論」で述べたように、台湾総督府の官僚制研究は、札幌農学校閥や長尾半平に代表される、主として前期武官総督期の農政や土木で力を発揮した技術官僚研究や、政党政治期における文官総督以下の高等官の人事（日本帝国圏内での政党と絡んだ人事異動）が主な研究対象である。台湾での研究もそれに台湾人下級官吏（普通文官試験に合格し、判任官や雇へ）の研究が加わっているのが目立つところであろう。

1　台湾の南投県にある国史館台湾文献館に保管されている台湾総督府の文書。同館ホームページの http://db.th.gov.tw/%7Etextdb/test/sotokufu/ をまずは参照されたい。

2　台北帝国大学が設置されたのは1928年、日本の台湾領有の33年後であった。

日本人調査マンのような官僚組織の主流でない人々は、官僚制研究の対象外であるかのようである。

しかしながら植民地台湾の調査マン、特に東部台湾や山地とそこに居住する台湾原住民族について調査した人々については今日、人類学（人類学史）から関心が向けられている。植民地台湾でもっとも精力的なフィールドワーカーだった森丑之助（もり　うしのすけ）について、台湾で楊南郡によって業績とその特異な生き様について発掘と再評価が行われた[3]。日本でも人類学者の笠原政治らによって『幻の人類学者　森丑之助――台湾原住民の研究に捧げた生涯――』[4]（風響社，2005年）という森を紹介する本が出た。台湾在住のジャーナリストである柳本通彦も、森および本論で論じる伊能嘉矩（いのう　かのり）と田代安定（たしろ　やすさだ）ら明治期台湾で調査活動に従事した3人の生き様を紹介する新書『明治の冒険科学者たち――新天地・台湾にかけた夢――』（新潮新書，2005年）を著している[5]。

また歴史学からは、博覧会での異文化表象について関心が向けられている。松田京子『帝国の視線――博覧会と異文化表象――』（吉川弘文館，2003年）は、台湾原住民族をはじめ琉球や植民地の人々を「展示」した学術人類館事件で知られる1903年の「第五回内国勧業博覧会」（大阪・天王寺で開催）について論じている。この松田も、博覧会で台湾表象の基礎をつくった人物の一人として伊能嘉矩に着目している。伊能は、植民地台湾でもっとも有名な文献調査者であり、原住民族調査もこなした調査マンであった。そして、人類学や歴史学からともにいわゆる「植民地主義と人類学」という観点から、植民地での人類学調査のあり方、そして調査に従事した本国人の（人類学研究者をも含む）調査マンの心性や生き様を論じる議論が登場している。例えば、山路勝彦・田中雅一編著の文字通り『植民地主義と人類学』（関西学院大学出版会，2002年）という共同研究であり、同じく山路勝彦の『台湾の植民地統治――〈無主の野蛮人〉という言説の展開――』（日本図書センター，2004年）である。このような植民地台湾で活動した本国人調査マンについての議論をもう一歩進め、植民地台湾で本国人が生きるのに無縁ではなかった植民地の総督府や官僚システムと絡めて、調査マンたちとその調査を（個々人を見るのでなく、まとめて比べて）見てみると面白いのではなかろうか[6]。

3　楊南郡（訳注）『生蕃行脚』（台北・遠流出版，2000年）。なお楊南郡は1990年代以降、日本植民地時期の台湾で原住民族の研究や統治行政の担い手となった人々を次々と取り上げては日本語文献の翻訳と人物紹介に携わっている。本論で取り上げる、伊能嘉矩・森丑之助・田代安定・野呂寧も皆、楊の紹介記事がある。

4　楊南郡著，笠原政治・宮岡真央子・宮崎聖子編訳。

5　本論に添えた顔写真のうち、野呂以外の3人は同書から採用した。野呂の顔写真は、林玫君『従探検到休閒――日治時期台湾登山活動之歴史図像――』（博揚文化，2006年）77頁からの孫引きである。

6　松田京子は『帝国の視線』86頁で「植民地官僚・伊能嘉矩」という言葉を用いている。他の人類学や博覧会研究でも、個々の調査マンを総督府官吏や嘱託と認識はしている。しかしながら複数の調査マンを植民地官僚たちと意識し、官僚制を意識して論じたものは、1930年代の総督府警務局で原住民族調査にあたった技術官僚を論じた、山路勝彦『台湾の植民地統治』の「第5章『文明化』への使命と『内地化』――台湾植民地官吏の実践――」程度しかないようだ。

なお、調査報告を執筆するものだけを調査マンと限定して議論するのは異論もあろうが、調査分担者まで議論に加えると、警察官や事務吏員（が中央から回ってきた調査票に基づき片手間に調べて回答したものを、中央で整理しただけという調査が、総督府では多かった）のような調査についての専門的訓練を受けたわけでない人々を議論することになって、話が拡散するので、当面は調査報告を出すような調査の元締めに議論を絞りたい。

1. 明治大正期台湾総督府の調査活動と調査マンたち ―原住民族調査を例として

本節では、明治期から大正期[7]にかけての台湾総督府の原住民族への調査活動、およびそれに関連した政治軍事活動・経済活動の概略を押さえ、どのような調査マンによってどのような報告が刊行されているかを述べたい。

日本の台湾占領は1895年である。占領前後から、台湾についての調査活動は行われており、漢族についての調査は、例えば民事慣行においては『台湾私法』などに結実して行く。しかしながら台湾は多民族社会であり、多数派である漢族系住民以外に原住民族が台湾の中央山地および東部の広範な地域に居住していた。植民統治のために台湾総督府は、彼らと彼らの居住地域についても調査する必要があった。

まず原住民族の調査報告について。原住民族については、東京帝国大学から派遣された鳥居龍蔵の調査[8]が先行するが、台湾総督府関係者が初期に刊行した調査報告は、伊能嘉矩・栗野伝之丞『台湾蕃人事情』（台湾総督府民政部文書課，1900年）になる[9]。同書について、笠原政治は「台湾先住民について、初めて全体像を示した古典的書物」と解説している。この後、伊能嘉矩（1867年生，1925年没）からは『台湾史』（東京・文学社，1902年）、『台湾蕃政史』（台湾総督府民政部，1904年）というフィールドの知識に歴史研究を加えた手法によって、原住民族を分類し、彼らと清朝との関係を明らかにする書物が出されている。後に、伊能は台湾から故郷の岩手県遠野に引き揚げてからも、原住民族を含む台湾について研究を続け、死後に『台湾文化志』（東京・刀江書院，1928年）として刊行した。伊能の原住民族の調査経路については、森口雄稔編著『伊能嘉矩の台湾踏査日記』（台湾風物雑誌社，1992年）が詳しい。

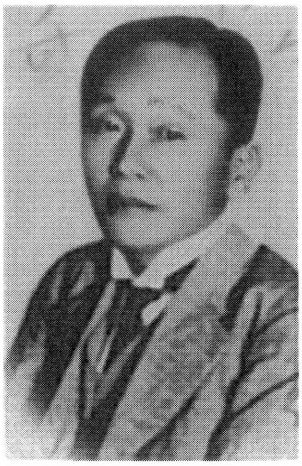
原住民族の調査でもう一人まとまった記述を残したのが、森丑之助（1877年生、1926年

7 台北帝国大学には、文政学部に土俗人類学教室が設置された。この土俗人類学教室は、移川子之蔵や宮本延人らが人類学的手法から台湾の原住民族研究を行い、『台湾高砂族系統所属の研究』（刀江書院，1935年）など価値の高い報告書を出している。しかしながら、本論は「はじめに」で述べたように、このような研究組織が出来る以前の調査マンについて議論するのが目的なので、帝国大学の調査を含め、昭和期の調査については今後の課題としたい。代わりに本文や上注でも触れた山路勝彦『台湾の植民地統治』を、昭和期の帝国大学や総督府の原住民族調査についての先行研究として紹介しておく。

8 調査報告は、『鳥居龍蔵全集』（朝日新聞社，1975–1977年）に収録されている。また、中薗英助『鳥居龍蔵伝』（岩波書店，1995年）など一般向け伝記でも、台湾調査の経路などが紹介されている。

9 2000年に草風館から、笠原政治・江田明彦の解題付で復刻されている。

伊能嘉矩



森丑之助

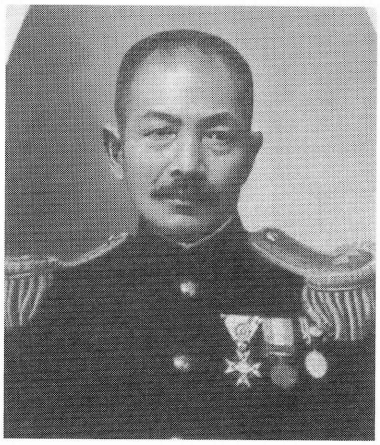
失踪）である。森は鳥居龍蔵に随行する形でフィールドワークを開始し、台湾の中央山脈横断だけで16回行うなど、生涯に渡って台湾の山野を歩き続けた。台湾総督府関係で出した刊行物としては『台湾蕃族図譜』第1・2巻（臨時台湾旧慣調査会，1915年）や『台湾蕃族志』第1巻・タイヤル篇（臨時台湾旧慣調査会，1916年）がある。他にも、森丙牛や丙牛生などのペンネームで月刊誌『台湾時報』や植民地台湾最大の日刊新聞であった『台湾日日新報』に多数の記事を掲載している[10]。

明治大正期の原住民族の民族調査者として著名なのは、伊能と森の2名であるが、原住民族の居住地域についての調査としては、他にも開発や土地整理の調査を行った田代安定や野呂寧を無視できない。

田代安定（1856年生、1928年没）[11]の調査は、『台東殖民地予察報文』（台湾総督府，1900年）として刊行されている。田代は占領直後の台湾各地で調査を行っているが、この調査は田代が1896年に今の花蓮を中心に行ったものの報告である。前半は花蓮など台湾東部の地理的概況、原住民族を中心とする居住する住民の状況が詳細に記述され、今でも台湾東部研究の重要資料である。後半は農業・園芸・牧畜・水産・樟脳（火薬やセルロイドの原料であった）・製糖・果実栽培の項目にわたって、台湾東部の産業開発の可能性を論じ、30万人以上の移民の可能性を指摘した。この『台東殖民地予察報文』に基づき、総督府は1910年代に花蓮付近で官営移民事業を行い、吉野村・豊田村・林田村という日本人移民村を建設した。移民が予期した成果を挙げることができずに1917年に中断するまで、3000

10　森の主な著作（ただし南洋群島、すなわち現在のミクロネシアなど台湾以外について書いた記事を除く）は、前掲『幻の人類学者　森丑之助』283頁から285頁に著作目録として整理掲載されている。また『幻の人類学者　森丑之助』277頁から281頁には森の年譜も掲載されている。なお『台湾蕃族志』はタイヤル篇しか刊行されなかったが、ブヌン篇に相当する記述が、『台湾時報』に連載されている。

11　田代は自叙史があるほか、永山規矩夫『田代安定翁』（1930年）という伝記がある。



晩年の田代安定

圖1-5：野呂寧。
資料來源：《臺灣山岳》，第4號。

人余りの日本人が元は原住民族居住地であった台湾東部に移住した[12]。

野呂寧（1868年生、1931年没）[13]の調査として最大のものは、『台湾官有林野整理事業報告書』（台湾総督府内務局地方課編，1926年）である。この報告書は、台湾総督府が（原住民族の所有権を否定し、漢族の所有権も確固としたもの以外は認めず）無主地国有原則に基づき「官有」とした台湾の林野を測量調査し、「要存置林野」（「国有林」として残しておく林野）、「準要存置林野」（原住民族の保留地で、要存置林野に準じて扱う）、「不要存置林野」（縁故者への払い下げなど「民有」として良い林野）に区分した事業の報告書である。同事業は、1915年4月に総督府民政部殖産局に林野整理課が設置されてから本格化し、1924年12月に伊澤総督による行政整理によって事業関係者の大半が免職となるまで継続した。この報告書は無署名だが、野呂は同事業の当初から関与し、1917年から1924年12月までは林野整理課長（および林野整理課の後継である地理課の課長）として事業全般を指揮していた。報告書刊行を含む残務整理こそ行わなかったが、事実上、この報告書は野呂を主とするものと考えてよいであろう[14]。他にも野呂は、蕃務本署の測量班の指揮者として新高山（今の玉山）など台湾の原住民族居住地を探検踏破しては測量を行い、

12　吉野村など移民事業についての研究は、張素玢『台湾的日本農業移民（1905–1945）——以官営移民為中心——』（国史館，2001年）が詳しい。

13　野呂寧に関する先行研究は、楊南郡『台湾百年花火』（台湾・玉山社，2002年）が、台湾の山岳探検と地形測量の大物として（そして遭難事件を起こした探検隊のリーダーとして）紹介している。他にも台湾では登山関係で時々言及されているが、それ以外の仕事とも絡めた分析はなさそうである。日本では、柳本通彦前掲書が12頁に『台湾百年花火』を引いて、明治の冒険科学者たちの一人として、「野呂寧（地形測量、山地探検）」と記しているがそれ以上の言及はない。なお、野呂の官歴については、2005年10月19日に日文研で「野呂寧——明治期台湾のある技術官僚について——」として報告済である。

14　残務整理の代わりに、台湾総督府が出す月刊誌となった『台湾時報』の1926年1月号に「林野整理事業の終結に就て」と題し、林野整理事業の元指導者としての立場から事業を総括する報告を行っている。

報告を出している。『台湾時報』への寄稿も少なくない。上記の台湾東部への官営移民事業も、殖産局移民課長としての野呂の指導による。

2. 明治期台湾総督府の調査マンたちの官歴

前節に述べたように、台湾の原住民族やその居住地についての調査は占領直後から着手され、1900年代以降、刊行物が出されるようになった。ではそれらを刊行した調査マンの台湾総督府官吏としての官歴[15]はどうであったであろうか。

最も高位に上ったのは、野呂寧である。1899年に陸地測量部から臨時台湾土地調査局に転籍して技手（判任官）として赴任した彼は、1901年には臨時台湾土地調査局監督官として高等官（奏任官，八等七級）に昇任した。まもなく臨時台湾土地調査局技師にも任じられた。臨時台湾土地調査局の閉局とともに測量に関する技師として総督府財務局の技師に転任、測量に関する技師として警察本署蕃務課（後に蕃務本署）の技師も兼務した。その後順調に等級を上げ、殖産局に移民課が設置されるとともに同局に転じ、移民課長・権度課長に就任、林野整理にも従事し、1915年には奏任官の最高位である三等一級に上り詰めた。最後は内務局地理課長に転じて、林野整理の指揮を続け、地方の奏任官を優遇するための勅任待遇制度（勅任官、すなわち一・二等の官吏と同等の待遇を得させる制度）が台湾総督府にも取り入れられると勅任待遇となった。台湾総督府を辞めたのは1924年12月の行政整理であり、整理時に名目的ではあるが勅任官である二等となっている。

次に出世したのは、田代安定である。1895年4月に陸軍省から雇員の名目で台湾従軍を許された彼は、同年6月、台湾総督府が設置されると民政局殖産部雇員となり、まもなく民政局殖産課技師（七等十級）に任じられた。『台東殖民地予察報文』はこの頃の仕事である。調査の後は児玉総督に熱帯植物殖育場創設を提案し、台湾南部の恒春（ここも原住民族の居住地域に接する）に熱帯植物殖育場（今日これは、墾丁の植物園として台湾の観光資源となっている）を設置して、1902年に主任となった。1910年まで同場の主任として運営に尽力し、その間に官等は三等四級に至った。その後は1915年まで技師を、続いて1919年まで台湾総督府の林業に関する嘱託を続けるが、年俸2000円の時もあって高等官並の待遇であった。

一方で、伊能嘉矩と森丑之助は全く出世しなかった。伊能嘉矩は1895年11月に陸軍省から雇員の辞令をもらって渡台し、総督府嘱託となる。ただし月俸50円であり、せいぜい判任官級の待遇である。ついで1896年に台湾総督府国語学校書記に任じられ、判任官六等になり、翌年には台湾総督府国語学校第二付属学校教諭となり、判任官五等に上って

15　現在、台湾の国史館は、公文類纂に残っている総督府高等官の履歴書（人事異動の際に本人から総督府に提出されたものである）を撮影して『日治時期台湾高等官履歴』として編集刊行するという事業を進めている。2006年11月時点で第3巻まで出され、第1巻として総督・民政長官（総務長官）の履歴、第2・3巻は台北帝国大学の教官（のうち高等官であるもの）の履歴を載せている。しかしながら、本論で論じる人々の履歴は、まだ刊行されていないか、（高等官でないので）そもそも刊行対象ではない。よって本論の履歴は、野呂寧については報告者自ら公文類纂に当たって調べた（没年は『台湾大年表』による）。他はそれぞれの伝記を参照した。

いる。しかしながら教育者としてはここまでで、その後は調査マンに転じた。台湾慣習調査会や臨時台湾旧慣調査会などで幹事に任じられながらも、身分としては総督府嘱託となり、1908年に嘱託のまま台湾を去っている。その後も何度か訪台するが、身分としては総督府嘱託のままであった。

森丑之助も1895年に陸軍通訳として渡台した。その後、上述のように鳥居龍蔵についたり個人で浪人のまま台湾を調査した。総督府に入ったのは、1905年には総督府殖産局で有用植物調査科の嘱託になった時である。1906年には当時の佐久間総督の巡視に同行している。1908年には総督府博物館の陳列員になり、1909年には臨時台湾旧慣調査会に蕃族科が設置されると、伊能とともに嘱託になっている。1913年に一時台湾を離れるが、1914年には再び台湾に戻り、臨時台湾旧慣調査会の嘱託となり、また博物館にも戻っている。1924年には総督府の嘱託をやめる。結局、1926年に船から失踪するまで、数多くの総督府嘱託をこなすが、どれも給与的には判任官程度であり、(原住民族研究の権威としての名はともかく) 世間的な高給とか権限とかとは無縁であった。

3. 調査マンと官僚制の壁

前節で紹介した調査マンたちは同じ時代に同じ地域を調査した人々であり、互いに面識はあった。単に面識があっただけでない。森は野呂の山岳測量調査隊に随行する形で民族調査をしているし、田代とも懇意であった。田代（1856年生）や野呂（1868年生）やと比べ年の若かった森（1877年生）は、著作の中でこれら先輩たちを鳥居龍蔵と並んで尊敬している。もちろん全ての先輩が尊敬されたわけではない。森は伊能（1867年生）の研究を、著作の中で批判し続けている[16]。そして伊能や田代と一緒に、『東京人類学会雑誌』に台湾の投稿を行っている。とはいえ繰り返しになるが、彼らは年齢や時間にずれはあっても同じ台湾の原住民族地域で調査を行っていた。そして野呂以外は皆1895年に台湾に渡っていた。では、片方は高等官の上まで上り、片方は安月給の嘱託のまま終わるというように、どうして処遇が違ってしまったのだろうか。

台湾総督府の官僚制は、戦前の官僚制の例に漏れず、親任官である総督の下、勅任官である民政長官（初期は民政局長、文官総督期以降は総務長官）や各局局長、そして奏任官である事務官や技師が業務を取り仕切り、それを判任官である属・技手が補佐し、さらに雇や傭人が下で働くという体制であった。嘱託はこれら官僚から業務の一部を依嘱された人々で、奏任官相当の嘱託から雇相当の嘱託までいた。占領初期こそ、広範な特別任用制度が採用されいわゆる無資格者でも奏任官や判任官になることができたが、特別任用制度はまもなく縮小され、事務官となるには高等文官試験に合格、属になるにも普通文官試験合格もしくは一定の学歴を有して、いわゆる有資格者になる必要があった。技師は詮考任用が行われており、高等文官試験に合格する必要はなかったが、大学や札幌農学校級の学

16 森の伊能批判を含めた森の交友関係については、『幻の人類学者　森丑之助』231頁から248頁所収の笠原政治「師・友人・訪問者たち」を参照されたい。234頁で笠原は森が伊能に「屈折した気持を抱いていたらしい」と指摘している。

歴、もしくは学歴に相当する十分な履歴や著作が必要であった。技手も同様に詮考任用されるだけの学歴もしくは履歴が必要である。

では、前節で紹介した調査マンたちの履歴はどうであったか。高等文官試験や普通文官試験に合格した者は誰もいない。大学や札幌農学校の卒業生もいない。しかしながら台湾に至るまでの履歴には無視できない差があった。

最年長の田代は、西郷隆盛や東郷平八郎らいわゆる維新の元勲たちと同じ鹿児島の加治屋町で生まれ、内務省や鹿児島県庁、農商務省に勤めた。農商務省時代は1884年に園芸博の委員に選ばれロシアに出張し、1885年には八重山群島を調査して報告書を執筆している。また1889年には東京帝国大学および文部省の依嘱で、海軍軍艦に乗ってハワイやキリバスを巡り調査している。1895年に渡台した時すでに満38歳であった。特別任用が幅を利かせた時代に技師に任用されるのには十分な履歴を有しており、特別任用が縮小され履歴不足や無能な官僚が淘汰されていった後藤時代初期でも、『台東殖民地予察報文』を出した彼はそのまま技師として詮考任用され続けるだけの資格があった。

最も高位に上った野呂は、陸軍の陸地測量部出身である。測量部で測量技術をたたき込まれ日清戦争にも従軍した後、技手（判任官）として（総督府本府でなく）臨時台湾土地調査局に転籍し任用された。技師への昇任を含め特別任用である。土地調査事業に従事した測量技術者は技師・技手ともに臨時土地調査局閉局によって解雇される中で、野呂は総督府技師へ転属する。この時は技師として（通常の奏任官として）詮考任用されている。その後は測量技術を活かした仕事を続け、技師として詮考任用され続けた。

一方で、伊能は岩手の師範学校を放校になり、その後は東京で東京毎日新聞社や東京教育社を経て、大日本教育新聞の編集長になっているものの、官職はなく、学歴としては小学校卒業のまま台湾に来た。それでも国語学校ではかつての職歴を評価されて判任官として書記や教諭に任じられたものの、調査マンとしては学歴・職歴ともに無いも同然であった。森に至っては、中学卒業の学歴があるだけで（長崎商業学校で中国南方官話を学ぶが中退）、職歴もないまま満18歳で渡台し、かつその後の10年間を浪人のまま、遺産などを使いながら自力で調査生活をして過した。

すなわち、官等を上っていった田代や野呂は、台湾総督府入りする前に官職を経験し、かつ総督府が特別任用で高等官になりやすかった時期（草創期に技師となった田代）や部局（臨時台湾土地調査局で技師となった野呂）に技師となって、そのまま実績を積んで技師として詮考任用され続けたのであった。

一方、伊能にはそのような前歴はなく、国語学校に在職しながら教諭としての職歴を積み上げるという方法も選ばなかったので、高等官に上って行く道筋が開かれていなかった。それでも1904年に伊能は『台湾蕃政史』の刊行と同時に文学博士の学位申請を出し、学位によって官を上ろうと考えた。しかしながら、官吏が政府の命令で調査した報告書が学位論文に該当するか質疑があり、1907年に伊能は学位申請を取り下げている。そして、1908年早々に伊能は台湾を引き払った。

森はそもそも官等には興味なかったと考えるべきであろう。仮に興味があったとしても、

組織の規則に無頓着に過ぎると（失踪後13年経った）1939年になっても回想され批判されていた森は、役人生活には向かなかったであろう。その意味では官僚制とは無縁である。そしてこれは同時に、幾ら台湾原住民族研究者として名を挙げても、台湾の原住民族統治に森は意見を差し挟むことができなかった（森の意見は聞き入れられなかった）ことを意味した。森は原住民族との平和共存を希望していたが、森にできたのは総督府批判の言動を吐いたり、意見を述べに回る程度であり、佐久間総督による原住民族への武力「討伐」を、反対しながらも傍観するしかなかった。

もちろん田代や野呂に、官僚制の壁がなかったわけではない。田代は30年に及ぶ台湾滞在に満足していなかった。その理由として田代は、台湾では政務に就きたかったとか、同じ殖産でも林務でなく農務に就きたかったと自叙伝である『駐台三十年自叙史』で述べている。新植民地であれこれ腕を振おうと渡台し、『台東殖民地予察報文』を執筆したのだけれど、自分がさせてもらったのは植物園経営だけで、官営移民事業などの植民地農業開発は全くさせてもらえなかったことを嘆いているのであろうか。植民地農業開発は（移民課長としての野呂も加わっているけれど、主として）札幌農学校出身の技師たちの担当であった。

田代に比べると、野呂は順調な人生を送っていった。退官後に彼は台湾を懐かしんで、『台湾時報』1926年2月号に「台湾は楽土なり」と書いたほどである。もちろんその彼にしても（他の多くの技師と同じく）奏任官の最高位である三等一級が官等の壁であったことは否めない。

おわりに

本論は、伊能嘉矩・森丑之助・田代安定・野呂寧という、明治大正期において原住民族とその居住地域について調査した4人の人々を取り上げ、台湾総督府の官僚制の中で、彼らがどのように処遇されたかを検討した。彼らは占領当初に台湾に渡り、同じような場所を調査し、好悪はあっても相互に認識していた。そして誰もが大学卒業でも高等文官試験合格者でもなかった。しかしながら、彼らへの処遇は同一でなく、片方は高等官三等まで上り、もう一方は判任官相当に止まった。高等官に上っても必ずしも官僚組織の中で自己の目的を果せたわけでなかったが、判任官相当の者は（調査を除き）なおさら自己の目的を果たすことは難しかった。すなわち官僚制は（野呂のような例外を除き）調査マンを調査と専門的な仕事にのみ閉じこめるものであり、かつ（能力はあっても）経歴不足のものには十分な官等も与えず冷遇するものであったと言っても過言ではなかろう。

このような調査マンを官僚制の観点を入れて比較することは、人類学（史）など他分野にどのような視点を提供できるであろうか。調査マンが同時代の調査活動の中でどのような位置付けを占めていたかがより解ってくるのではなかろうか。例えば、森丑之助の場合である。単に森の個人史を調べ、森の著作を分析し、森の交友関係を洗うだけでなく（もちろんそれを行った、楊南郡や笠原政治の業績は優れているのだが）、森としばしば調査活動を共にし、かつ森とは正反対に、総督府の官僚機構にどっぷりと入り込んだ（植民地

主義を推進する側にいた）野呂の動きを調べ森と比較することで、森の調査活動がどういう意味を持ってくるかが、より解ってくるのではあるまいか。森の言動についても、例えば同じ事件に野呂はどのような言説を吐いたかを比べることで、見えることはないだろうか。野呂は森ほどの執筆数でなく、また立場上感情をあらわにしたことは書かないけれども、高等官としては多く書いているほうである。志田梅太郎（測量技術者、臨時台湾土地調査局技手を経て総督府の嘱託となり、1911年に原住民族に馘首される）の追悼のように、森と野呂が同じ人物を論じていることもある。

要　旨

台湾総督府は活発な調査活動を行っていたことで知られている。では、調査活動に携わっていた調査マンたちは、台湾総督府の官僚組織の中でどのように処遇されていたのであろうか。

本論は、植民地初期から1910年代にかけての台湾総督府の原住民族調査担当者であった森丑之助・伊能嘉矩・田代安定、および野呂寧の4名について、考察したものである。この時期は台湾総督府が原住民族に対し武力征服をする前（および武力征服を準備している最中）であるが、最近、人類学（史）の観点から、この時期の原住民族調査担当者についての研究が進められている。また歴史学でも当時の人類学による異文化表象の問題を論じた研究がある。ただこれらの研究では、調査担当者が総督府の官僚の端くれであること、嘱託だとしても官僚組織とは無縁ではなかったことまでは意識しても、彼ら初期の調査担当者を官僚組織側から見てみようという意識は見あたらない。そこで既存の人類学史研究を利用しながら、整理し見直してみた。

結論として、調査活動そして人類学史の評価と、官僚組織での処遇は無関係であった。すなわち、高等官として官歴を歩めたものは昇進して行くが、そうでないものは幾ら業績を積み、大著を著しても昇進できなかった。このような結論はある程度予想されたものであるが、この結論を人類学史に投げ返すことで、調査マンの同時代・同時代人の中における位置付けがより明かになってくると思われる。